

『鬼滅の刃』¹のソースとして Bram Stoker, *Dracula* (1897) を読み直す

吉田 朱美

「コロナ禍メタファー」として機能する『鬼滅の刃』、その深層構造に潜伏する *Dracula*

映画『鬼滅の刃——無限列車編』は2020年秋の公開以来、コロナ禍という逆境にもかかわらず多くの観客を集め、2021年6月の時点で興行収入400億円を超える記録的ヒットとなっている。人気の秘密としてその物語内容が、まさにコロナ禍の状況とフィットするものであったからだということは小和田哲男『鬼滅の日本史』、一条真也『「鬼滅の刃」に学ぶ——なぜ、コロナ禍の中で大ヒットしたのか』などの著作においても既に指摘されている。人間に寄生し、人間を襲う機会をひそかに狙う「鬼」のイメージは、病や感染症の暗喩としてうまく機能し、その悪い「鬼」をせん滅するため勇気と知恵とを結集し、力を合わせ共に戦う人間の作中人物たちに鑑賞者が感情移入しやすい図式を提供してくれる。

[...]鬼という存在は、あるもののメタファーとなっています。それは「疫病」です。最近で言うなら、「新型コロナウイルス」です。禰豆子を連れ歩く炭治郎は、「鬼と共生する人間」なのです。すなわち、これは「ウィズ・コロナ」そのものではないでしょうか。(一条19)

強力な鬼に対して、傷つき、時に死者を出しながら立ち向かう鬼殺隊の姿は、新型コロナウイルスに恐怖しながらも、疫病を撲滅するために懸命に闘ってきた人類の歴史そのものといえるだろう。この新型コロナウイルスへの恐怖感と鬼殺隊への共感と応援こそが、『鬼滅の刃』の大ヒットの大きな要因と考えられる。(小和田144)

しかし、この映画が企画・制作されたのも、また原作であるコミックが刊行されていたのも、未曾有といわれるこの感染症の出現を未だ予見できていない時点であった。ではなぜ、感染症の恐怖を予言的な形で巧みに織り込んだような物語が作られ得たのか。それを可能とした要因の一つとして、『鬼滅の刃』作者の吾峠呼世晴氏が Bram Stoker の *Dracula* を深く読み込み²、120年前に書かれたこの物語からその着想の多くを得たうえで、設定を大正時代の日本に移して『鬼滅の刃』を制作した可能性について検証し、そしてそのソースとしての *Dracula* 中の吸血鬼イメージには既にコレラやインフルエンザといった感染症への恐怖が織り込まれていたということを確認しておく必要があるだろう。Stoker の母親がスライゴで経験したコレラの大流行、そこで見られた「生きながら埋められる」患者の姿が、*Dracula* における「意識を持ちながら同時に死んでいる」吸血鬼の描写に生かされているというのは *Atlas Obscura* 紙に2020年6月に掲載された Ronan O'Connell 氏による記事においても記述されている。

楚輪正人は『鬼滅の刃』の主人公である炭治郎と、力や復讐のテーマを扱う『ワンピース』や『ドラゴンボール』といったコミックや英米小説の主人公、エイハブ船長やヒースクリフらを比較するが、*Dracula* に言及することはない：

Tanjiro, however, is not a luster after power like Luffy or Goku. He is not completely crazed by his desire for revenge like, for example, Captain Ahab or Heathcliff, either. Tanjiro's purpose in life is just to bring his demonized sister back into being a normal person. Unlike Luffy or Goku, Tanjiro is not ambitious but just an ordinary boy. He happens to be destined to be a demon slayer for his sister who has been transformed into a demon. His sole purpose in life is to regain family ties and the universal yearning for a simple normal lifestyle, which was taken for granted until the sudden appearance of disasters such as the demonic forces in the world. (Sowa 62; underline mine)

しかし上記下線部「炭治郎が人生の目的とするのはただ、鬼にされてしまった妹を正常な人間に戻すことだけ」「彼は偶然、鬼に変えられてしまった妹のため鬼殺隊の剣士となるべく運命づけられただけ」というのはまさに、小説 *Dracula* 中で *Dracula* 伯爵により妻 Mina を吸血鬼に変えられてしまい、彼女を本来の人間の状態に戻すべく吸血鬼退治を決意する Jonathan Harker と炭治郎との結びつきを示すものであるといえよう。

Dracula の吸血鬼も『鬼滅の刃』の鬼も、ともに血液を介して増殖し、不死性を獲得し、無意識や夢の領域を通じて人間をコントロールする。『鬼滅の刃』において主人公の妹である禰豆子は自らの意思によらず、鬼の首領の血を受けてしまったために「鬼化」する。鬼退治を通じて彼女をもとの人間に戻すことを主人公がミッションとして引き受けることは、*Dracula* において感染させられた Mina Harker を浄め、治療しようと男性登場人物たちが知恵と勇気を結集し、戦いを挑む図式を下敷きに行っていると考えられる。

ヴィクトリア朝の吸血鬼物語が移植され、語り直されることによって、*Dracula* に織り込まれた当時のイデオロギーが現代に蘇り、再生産・再拡大されてしまっているというような側面はないかについても考察の余地がある。*Dracula* において吸血鬼である状態と『鬼滅の刃』における「鬼化」とはいずれも、悪の烙印であるとともに感染症であり、どちらの物語においても、その治療は医学の分野の知識を駆使して行われなければならない。*Dracula* にみられる外国人恐怖(xenophobia)については『鬼滅の刃』において注意深く修正され、「他者」の排斥に向かう要素が和らげられているものの、「病気」であることと道徳的な「悪」とが結びつけられ、正義の側が自己犠牲的にそれと闘う、という図式は維持される。「鬼である」という症状だけでなく、その症状の持ち主である「鬼」も滅ぼされるべき「悪」として認識されるわけである。新型コロナウイルスの感染拡大時にも感染者に対する差別や非難が社会問題となったが、Samuel Butler のディストピア小説 *Erewhon* (1872) において描かれる、「病気にかかったものが非難され、罰される」倒錯した *Erewhon* 国の社会政策が現実になったかのような様相を呈することとなったといえるかもしれない。

映画『無限列車編』では夢や無意識の領域を侵略することによって人間を餌食とする鬼「厭夢」と鬼殺隊との対決のエピソードが中心となるが、鬼殺隊メンバーは「無意識領域」においても相手が付け入る隙を与えず、撥ね返す。これは *Dracula* において Jonathan Harker や Lucy Westenra が夢うつつ、あるいは夢遊病の状態にあるところを女吸血鬼たちや *Dracula* 伯爵が餌食にしようと狙ってくるのを踏まえたものであろう。

「鬼化」への誘いに潜む性的なコノテーションは『無限列車編』末尾、厭夢から見事全乗客を救いきった鬼殺隊の「柱」たる煉獄寿太郎のもとへ、彼の若く美しい肉体と見事な戦いぶりに目を留めた「上弦の鬼」猗窩座がスカウトに来るシーンにおいて顕著である。猗窩座の「人間のままであるとその若さも美しさも失われてしまう。鬼になれ」との説得にはやはり 19 世紀末の Oscar Wilde, *The Picture of Dorian Gray* (1890) とも通じる、若さ美しさへの固執がみられるが、Darwin 以降、来世への信仰が揺らぐとともに「この世」における、今この瞬間の生の価値が絶対的なものとなってきたことを反映した価値観ともいえるであろう。Talia Schaffer は *Dracula* の人物像が Wilde の同性愛者としての奇怪さをモデルとして造形されていると指摘する(Schaffer 471)。

Stoker は古代エジプト文化のマニアでもあった。キリスト教的な道徳とは別の価値観・システムのもとで「生きた人間の血をすすりつづけることにより永遠の命を保つ」*Dracula* の在り方には、この世でいったん死したのちもミイラとして肉体を保存し、「死者の書」に従って注意深くふるまうことで永遠に生き続けることを希求した古代エジプト人たちの価値観が生きており、それが猗窩座へと受け継がれている。

猗窩座の誘いを退け、自らの命をなげうって最後まで他者のために戦い抜く決断をする煉獄に「利他主義 Altruism」の精神が見られることを指摘した上で、キリスト教の影響は考えにくいとし、老子の中国思想などに由来するものではないかと楚輪は述べる (Sowa 75)。しかし『鬼滅の刃』にみられるこの Altruism にもやはり、*Dracula* 退治に関わる登場人物たちの気高いながらも、富国強兵政策や優生学とも結びつく面も有していたヴィクトリア朝の利他主義思想から受け継がれたところはないだろうか。猗窩座を「嫌い」と言い切って拒む煉獄の姿勢には、利他主義的な倫理観とともに、homophobic な嫌悪感も見え隠れする。

註

- 1 本稿では映画『無限列車編』を中心に扱うが、適宜単行本フォーマットの『鬼滅の刃』も参照する。
- 2 『鬼滅の刃』の前身『過狩り狩り』が「和風ドラキュラ」として構想されたという作者吾峠呼世晴氏自身の言葉が「物語の面白さを考えるブログ」に紹介されている。<ameblo.jp/dragon-time/entry-12533131479.html> 2021 年 12 月 18 日閲覧。

参考文献

吾峠呼世晴『鬼滅の刃 1 残酷』2016 年。集英社、2021 年。

――『鬼滅の刃 7 狭所の攻防』2017 年。集英社、2021 年。

一条真也『「鬼滅の刃」に学ぶ――なぜ、コロナ禍の中で大ヒットしたのか』現代書林、2021 年。

小和田哲男監修『鬼滅の日本史』宝島社、2021 年。

O'Connell, "The Deadly Irish Epidemic that Helped Bring Dracula to Life." *Atlas Obscura*. June 3, 2020. Web.

Schaffer, Talia. "A Wilde Desire Took Me: The Homoerotic History of *Dracula*." rpt. in Nina Auerbach and David J. Skal eds., *Dracula*. Norton, 1997. 470-482.

Sowa, Masato. "The Theme and Structure in *Demon Slayer: Kimetsu no Yaiba*: The Hero's Pursuit of Strength." 『金城学院大学論集 人文科学編』18:1(2021): 61-78.

Stoker, Bram. *Dracula*. 1897. Edited by Nina Auerbach and David J. Skal. Norton, 1997.